

「日本」という国の多様性を映し出す鏡

國分 麻里 (筑波大学/社会科教育学)

우리 학교 (ウリハッキョ)

- ◆ 種別：DVD ビデオ (ドキュメンタリー)
 - ◆ 監督：김명준 (キム・ミョンジュン)
 - ◆ 製作年：2006 年
 - ◆ 製作国：韓国
 - ◆ 発売元：스튜디오느림보 (スタジオ ヌリムボ)
 - ◆ 販売元：스튜디오느림보 (スタジオ ヌリムボ)
／한국독립영화협회 (韓国独立映画協会)
 - ◆ 時間：本編 131 分
 - ◆ 音声：ハン글
 - ◆ 字幕：ハン글/日本語/英語/フランス語/スペイン語
- ※ 北海道朝鮮初中高級学校で税送料込 5,080 円にて入手可



© 2006 STUDIO NURIMBO

あらすじ

日本に生まれて育ったが、‘朝鮮人としての私’を守るために、日本の学校ではなく朝鮮学校に通う子どもたちの日常を、韓国の映画監督が3年間にわたって記録した。2006年韓国釜山国際映画祭最優秀韓国ドキュメンタリー賞受賞。

シーン再現

＜北海道では女子は制服のチマチョゴリだけでは寒い。詰襟の下に暖かいセーターを着ている男子に、女子が服装のことで意見を言う。その後、カメラに向かってひとりずつ自分の意見を述べる＞

男子生徒：日本で民族性を守ると、自分の国で、つまり南朝鮮（韓国）で民族性を守るのはち

よっと質が異なるでしょう。南朝鮮では内面的なことをよく守っていればいいが、日本で生きている在日同胞たちは内面だけを守っていてもそれが外面に現れないと、外面が次第に内面を侵食していき、結局日本人と同じになる。だから、チマチョゴリも着なければならぬし、私たちの言葉も守らなければならぬ。

女子学生(1)：やはり制服はきちんと正しく着ないと、日本の女子学生の短いスカートのようになるのではないか。

女子学生(2)：寒いけど、(チマチョゴリは) かわいいでしょう。それを着ると朝鮮人としての意識が大きくなるというか。私に勇気を与えるというか。

Chapter

1. 雪が降る日/2'23
2. 入学式/5'59
3. 合唱コンクールの練習/13'21
4. 寄宿舎生活/14'58
5. ウリマルの勉強/7'41
6. 保護者の願い/4'21
7. 楽しい運動会/5'17
8. 家庭訪問旅行/3'20
9. サッカーの試合/21'11
10. 愛すべき生徒たち/9'27
11. 祖国訪問/10'23
12. 我が祖国の統一/13'31
13. 卒業式/14'33
14. 朝鮮学校から来た手紙/4'05

※ 筆者翻訳



1945年8月15日。日本の「敗戦」は、朝鮮半島の人々にとっては日本からの「解放」を迎えた日でもあった。1910年の「韓国併合」以後、日本に移り住んだ朝鮮人は約200万人であり、この8月15日を境に、先を急ぐように朝鮮半島へ140万人が帰還した。しかし、米ソの冷戦が始まり不安定になる半島情勢、所持金や手荷物の制限という外的要因により、60万人の朝鮮人が日本にとどまった。朝鮮半島へ帰りたいたいという気持ちを持ちながらも、今は難しいという現実的な判断をし、いつか南北が「統一」した祖国に帰る選択した人々である。

朝鮮学校は、朝鮮半島に帰還する前に日本に失われた自分たちの言葉（ウリマル）を学ぶために、日本各地に600校建設された国語講習会が前身である。国語講習会は、朝鮮人の相互扶助団体であった在日本朝鮮人連盟（朝連）の支援により、その後は体系的な民族教育を行なう朝鮮学校となった。朝鮮戦争（1950-1953）後の南北対立が激化する中で、北朝鮮が積極的に朝鮮学校に資金援助をした反面、韓国政府は何もしない棄民政策を取ったため、自然と朝鮮学校は北朝鮮の影響を受けるようになった。

「ウリハッキョ」（‘私たちの学校’ という意味）という映画は、北海道朝鮮初中高級学校で生活する児童生徒の日常を3年間追い続けた記録である。もちろん、記録といっても映画であるから意図されたドキュメンタリーではあるが、朝鮮学校の世界を垣間見ることができる。その中でも、興味深かった場面を3つ紹介したい。1つ目は、朝鮮学校と日本との関係である。日本人のフジシロ先生は、サッカー指導をした縁で朝鮮学校に就職し、そこでハングルを一から学び、保健体育とサッカー部を担当する。また、会話はハングルのみの学校で、数人の生徒が教室でスピッツ「空も飛べるはず」を日本語で歌う場面は色々と考えさせられる。2つ目は、生徒の国籍が多様である。「朝鮮」籍（朝鮮は地域を指す呼称で国籍ではない）、韓国籍、日本籍の学生もいる。3つ目は、北朝鮮修学旅行の様子である。北朝鮮に「帰国」した生徒の伸び伸びとした気持ちのよい姿が描かれる。また、対立でもなく同化でもない、韓国人監督が自らの視点で撮影し、韓国の映画祭で賞を得たという点も特筆される。韓国では、在日韓国・朝鮮人に関わる問題は日本国内のこととされ、関心がとても薄いからである。

日本で外国人登録している者は、2007年に初めて中国が韓国・朝鮮を抜いて一位となった。しかし、「日本」という国の多様性を映し出す鏡として、朝鮮学校の存在は重要である。国際理解教育や多文化教育は、外国に例を求めずとも、自らの足元にこうした貴重な素材を持っている。

「同じ」と「違い」を知り、尊重する

Information

【書籍】

- ・ 『日韓交流の歴史－先史から現代まで－』 明石書店、2007年
- ・ 『在日コリアンの歴史』 明石書店、2006年
- ・ 『知っていますか、朝鮮学校』 岩波ブックレット、2012年